すべては子どもたちの笑顔のために

東信教育事務所だより

響

特別号　学びの改革実践校ミーティング特集 No.2

令和３年３月９日（火）

学びの改革実践校から学ぶ
未来に生きる子どもたちの学びをどうするか

「学びの改革実践校ミーティング特集」No.2 をお届けします。No.2 では、上田市立第四中学校と佐久平浅間小学校（実践校ミーティングは中止）の学びの改革について紹介します。

課題を自分で解決する力をつける「単元テスト」
主体的な学びに取り組む場の設定：「四中アカデミー」　第四中学校

- 中間テストを廃止し単元テストを導入。再チャレンジを導入する中で、生徒が進んで学ぶ姿が生まれてきています。
- 学習の主体性を引き出すために、地域の方や大学生などを招き、学習を行う四中アカデミーを始めました。

様々な学校改革に取り組まれた理由は何ですか？

主体的に学習に取り組む生徒たちに

第四中学校の生徒たちは、とても素直で、いろいろな事に真面目に取り組める良さがあります。一方で０から１を創り出すようなことや、自分でその場の状況を判断し動き出す力が弱いのではないかという課題が感じられました。学習面も含めて、主体的に関わる（自分のことは自分で考え、判断し、行動する）生徒の育成を目指しました。そのために、できることから始めています。

第四中学校では、目指す「最上位の目標は何か」そのために「最優先にしなければいけないことは何か」と、校長先生のリーダーシップのもと、職員が同じスタートライに立ってこの学校に何ができるかを考え共有しながら学びの改革を進めていきました。

第四中学校の主な取組

〇中間テストを「単元テスト」に変え、指導と評価の一体化を図っていく。
　自分の課題にいち早く気づき、課題を解決するために主体的に学習に取り組む生徒を目指す。
　単元テストでは主に「知識・技能」、期末テストでは、単元テストの内容の定着を含め、主に「思考力・判断力・表現力」を見る。
〇地域と連携した放課後学習「四中アカデミー」の実施。
〇主体的に活動を生み出す場「四中クリエイティブタイム」の実施。
　11 月・12 月は生徒会主体で SDGs全校ディスカッションを行い、各委員会の提案発表を行った。
〇生徒の主体性を伸張させるための職員研修
　・四中アカデミーの人材確保や連携　・キャリア教育とつながるコミュニティー化の推進
　・先進校や専門家に学ぶ研修会

どうして単元テストを行うようになったのですか？

今までの定期テストでは、「できた」、「できなかった」だけで終わってしまっていた生徒もいるかもしれません。しかし、これから第四中学校で目指す姿は、学んだ内容が本当に身についたのかを自分でチェックし、友だちとの関わりや自分の工夫で「自分の力を伸ばす」生徒の姿です。そこで、中間テストを廃止し、定期的に行う単元テストと期末テストによる評価へと切り替えました。

単元テストでは、①範囲が狭くなり、勉強しやすくなる ②理解できたか、その場でチェックできる ③学習のつまずきをすぐに修正できる などの理由から自分自身で学習の仕方をコントロールできると考えました。実際に、「一単元だけなら自分でもちょっと頑張れる」、「来週は国語と社会の問題集を重点的にやってみよう」と、これまでの作業的な宿題から、計画的に学習する予定を立てたり、苦手な部分に焦点を当てて取り組んだりと自分から学びに向かう姿も見られるようになりました。また、採点をしている職員も「なぜこの部分ができないのか」と授業を振り返り、必要な場面の補習をすぐに行い定着につなげています。

水曜日の清掃をなしにして生み出した 45 分間で、2教科の単元テストを今年度は 6 月から 23 回行いました。回数が多くなると、やる気の維持や、テストに向けてじっくり取り組む期間が短いなど新たな課題も見えてきましたが、単元テストで「思うような点数がとれなかった」と思った生徒同士が、一緒に勉強し再チャレンジテストに挑み、結果に満足する姿も見られるようになってきました。

黙々と取り組む単元テスト

単元テストでは主に知識・技能、期末テストでは知識・技能の定着とともに思考力・判断力・表現力、と評価の内容を明確にしています。「誰の何のための学びか」を教員自身が感じ、動き始めるための仕組み作りに積極的に取り組んでいる第四中学校のエネルギーを感じます。

四中アカデミーはどのように運営していますか？

第四中学校では、主体的に学習に取り組む場として、ノー部活デーの水曜日の放課後、全校生徒対象に学び直しや学びを高めたい自学をサポートしたり、単元テストの再チャレンジテストを行ったりする四中アカデミーを開設しました。講師には、大学生、企業の方、保護者・地域の方などに、「地域の子どもを育てる」という意識で参加していただいています。目指しているのは、生徒の主体性を引き出すことです。つまり、目的をもって自ら学ぶ内容を決め、分からないところを聞き、成果を実感しながら次の学びにつなげ

地域の方と共に 四中アカデミー

ていく姿です。参観当日にも、「今日は数学をやる」と自分でやることを決めたり、「ここがどうしても分からないんです」と講師の先生からの指導や激励の声をかけてもらったりしながら、自分でやることを決めて打ち込んでいる生徒の姿が見られました。結果や成果ももちろんですが、この四中アカデミーでも、一貫して生徒の主体性を一番に考えています。

＜実践校ミーティング参観者の感想より＞

○「主体的に」ということをねらって、四中アカデミー、四中クリエイティブタイム、単元テスト等新しい取組にチャレンジしている姿勢を見習っていきたい。

○指導と評価の一体化に向け、目的のようになっていた中間・期末テストを指導に生かし、授業に生かす評価としての単元テストの導入の考え方を、是非大切にして発展していけるとよい。

○改革が全て生徒の実態からスタートし、方向性を示しているため、教員も協働して取り組めるのだと感じる。学校として大切にする柱を明確にすることの大切さを感じた。

他にどのような取組を行っていますか？

第四中学校では、生徒が主体的に活動する場として、生徒会や生徒が主体となって企画・運営を行う「四中クリエイティブタイム」を開設しました。臨時休校の影響などで当初は願う活動はできませんでしたが、11 月には生徒会が中心となって、生徒会特別目標「認め合う」のもと、SDGs全校ディスカッションを行う企画を立ち上げ、運営を行いました。専門家のお話をお聞きしたり、委員会毎の提言をまとめたりする中で、「四中生にできること」という活動の一歩を踏み出しました。全校生徒が、これまでの固定化した特別週間の取組だけではなく、自分たちがやりたい新たな活動を立ち上げ、動き出してもよいということが保障されていることを実感し始めています。

工藤勇一先生による Web 講演会

また、職員も、元麹町中学校長工藤勇一先生による Web 講演会をお聞きしたり、須坂市立東中、長野市立東部中への視察を実施したりする中で、生徒の主体性を伸長させるために、他校の取組をどうすれば四中として活かしていけるか、次年度に向けて提案や検討を重ねています。

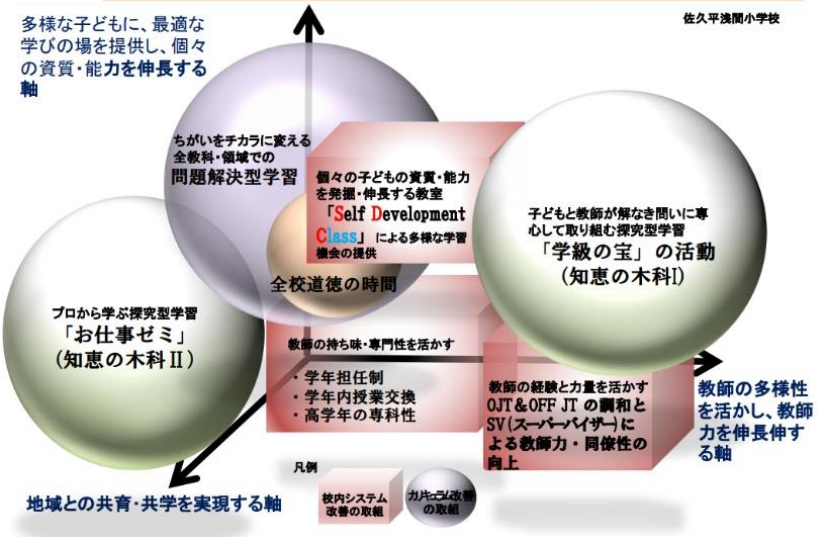
第四中学校では、「生徒の主体性」を育てるために何ができるかを校長先生はじめ先生方で考え、できそうなことはやってみることで学びの改革を進めています。一番大切にしたいことは何かを明確にもち、全職員が自分にできることを試行錯誤しながら進んでいます。正解のない取組に真正面から向き合っている姿が、きっと生徒たちの主体性にもつながっていくと感じます。第四中学校は、次年度も動き出したこの取組を継続的に進めていきます。

ちがいをチカラに変える学校づくり　「自己開発学級(SDC)」開設
「校内ｽｰﾊﾟｰﾊﾞｲｻﾞｰ」による教師力・同僚性の向上佐久平浅間小学校

- 自己開発学級を開設し、多様な学習の場を提供しています。
- ベテラン職員を校内研修スーパーバイザーとして任命し、若手教員への指導･助言を行い、授業力ＵＰにつなげています。

佐久平浅間小学校では、①多様な子どもたちに最適な学びの場を提供する軸、②地域との共育、共学の軸、③多様な教師力を生かす軸に関わる子ども・地域・教師の三者のもつちがいを基にして、カリキュラムや校内システムの構築など、子どもたちの学びを支え資質・能力の育成のために学びの改革を進めてきました。これまでの取組に加え、今年度は新たに創りかえ挑戦しいていくこととして「自己開発学級(Self Development Class)」と「教師力・同僚性の向上」に取り組みました。

「ちがいをチカラに変える学校づくり」イメージ図



佐久平浅間小学校の主な取組

○全教科・領域での問題解決型学習
○子どもと教師が解なき問いに専心して取り組む探究型学習「知恵の木科Ⅰ」 学級の宝活動
○プロから学ぶ探究型学習「知恵の木科Ⅱ」 お仕事ゼミ
○教師の持ち味・専門性を生かす 学年担任制 学年内授業交換 高学年の専科制
○全校道徳の時間
○個々の子どもの資質・能力を発掘・伸長する自己開発学級（Self Development Class）による多様な学習機会の提供
○教師の経験と力量を生かす校内研修・校外研修の調和とスーパーバイザーによる教師力・同僚性の向上

自己開発学級（SDC）とはどのようなクラスなのですか？

学校の中には「海外生活が長く、英語は堪能なのに学級の中では使わない子」「プログラミングの知識・技能はありながら集団の中で学ぶことができない子」など、多様で多才な個性と能力を秘めた子どもがいます。このような子どもたちに、自分のよさや能力を発掘・伸長できる場をと創られたのが自己開発学級（SDC）です。

学級担任ではない専門的な指導力をもつ教師が各自己開発学級の担当となり、週2時間程度の授業を受けもち一人一人の能力を伸ばします。その時間の担当者の学級の授業は加配教員が受けもっています。加配教員が配当されたことで、空き時間をつくり出すことができたため、先生方の得意分野を生かす自己開発学級を開設することができました。

（1）「僕の夢が広がった」プログラミングの能力を校内安全に生かす

昇降口の熱中症アラート

昨年度、一度も登校できなかった O さんは、このプログラミング自己開発学級の開設で、自分の力を発揮する場を見つけました。ここでは、技術科の免許をもつK先生と「みんなの役に立つものを作ろう」と熱中症アラートシステムを作成しました。O さんは、運動会練習で暑さに困っている声を聞く中、センサーが使えることをK先生から提案され、自分の力が生かせるのではないかと考えました。室外センサーが 30 度を越えると、児童昇降口に設置されたボードから熱中症予防を呼びかける装置（温度によっていろいろな警報音が鳴る）を作り、全校児童の熱中症予防につなげました。O さんは、装置の周りに人だかりができているのを陰から見ながら、自分の能力が人のために役立つことを知り「僕の夢が広がった」とつぶやきました。

今は、新たに、校内を走ることによる事故が増えないようにと、歩くことでポイントがたまり楽しみながら校内安全への効果が期待されるウオーキングポイントシステムの実証実験中です。週 3 日登校できるようになった O さんにとって自己開発学級は、自分の能力をみんなのために開花させ、さらに自信をもって次の一歩を踏み出す力を生み出す場となっています。

（2）“I think this is best!” 英語の能力を高め、活用する

英語自己開発学級の授業

英語自己開発学級は、海外での生活経験のある異なる学年の 4 名と、担当教師、ALT で開設されました。この教室では基本的に英語で授業が進みます。参観当日は身近な出来事を語り合う small talkから始まり、基本的な文法などを学びながら、「英語バージョンの校歌を作って全校で歌おう」という中心活動を行っていました。

校歌の「ほらあした」の部分を英語に訳しているとき、Hey tomorrow と意見が出たとき「ううん、なんか意味が違う」とつぶやきが出ます。子どもたちは「子どもたちには未来があるってこと」「明るい未来」と各自の解釈を伝え合います。There's a future. や There's a bright future.と提案があり、曲に合わせて歌ってみると“I think this is best!　I think there's a future is best!”と力強く答える姿がありました。子どもたちは、単なる英訳ではなく、歌詞の意味をより正確に英語として伝えるために考え、話し合い、結論を出していきました。子どもたちは 「ここでは自由にいっぱい英語が使えて、みんなで考えられるから楽しい」と感想を語ってくれました。

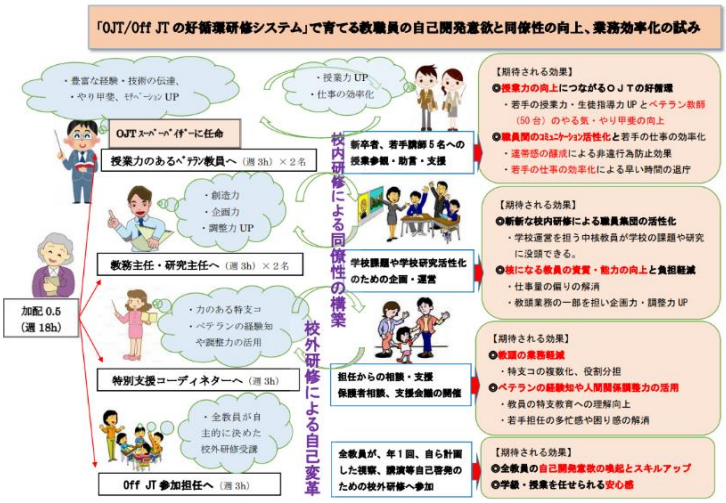
3月には、校歌の 1 番がほぼ完成しましたと歌とピアノで発表する全校放送を行いました。そして、「最後の佐久平浅間小学校という部分を英語で表せる言葉を募集します」と全校に呼びかけました。全校で英語の校歌を歌う日も近づいてきています。

多様な個の能力をどのようにして伸ばしていくのか、どのように人と関わり合いながら成長することを可能にするのか自己開発学級の取組から、これからの教育のあり方を考えさせられます。自己開発学級で自分の可能性を広げていく子どもたちの姿を目の当たりにして、自分を生かし伸ばす場や人とのつながりづくりが果たす役割の大きさを感じます。

教師力、同僚性の向上にどのように取り組みましたか？

佐久平浅間小学校では校内研修・校外研修の好循環研修システムで教職員の自己開発意欲を育て、同僚性を向上させる取組を行っています。

授業力のあるベテラン教員を校内研修スーパーバイザーに任命し、加配教員の配置で生み出された空き時間を活用し、新卒者や若手教員の授業参観や助言・支援を行いました。決まった時間の研修ではなく、悩みがあったり困ったりしたときに即時相談に乗り、授業を見たり見せたりしながら具体的な方法を共に考え校内研修を進めてきました。校内研修の輪は、周りにも広がり研究主任やベテランの先生方にいつでも誰からでも声がかけられ、自分の授業力を向上させようとする同僚性が育まれてきました。若手教員の中には、校長先生の全校道徳に続けと全校学活にチャレンジする姿も見られました。教頭先生は、「いつでもそれぞれの先生方の強みを学ぶことができる、まるで全校メンター方式のようでした」と語っていました。



また、全職員が校外研修を自主的に決め、受講する計画でしたが、今年度はなかなかその機会に恵まれませんでした。しかし、学びの改革実践校の視察で ICT 教育の先進的な研究を行っているつくば市のみどりの学園に行った報告会では、「この学校もゼロからのスタートだけれど、職員が協力しながら教え合いながら進めている。私たちもICTの新しい取組にも挑戦していける」と他校の実践から自校の取組に生かしていこうとする姿がありました。

佐久平浅間小学校の取組を詳細にお知らせすることはできませんでしたが、全ての取組において、教師、子ども、地域のちがいから学び、自分の力に変えていくことを核として学校運営を行っていると感じました。子どもの「学びたい」にどこまで応えることができるか、学校の体制と教師の改革に挑戦し続けています。教師も子どもも自分の可能性を広げ続けている姿こそが、学びの改革で目指す、未来に生きる子どもたちの学びではないかと感じています。

今年度学びの改革実践校５校を取材させていただきました。共通して感じたことは、各校で未来を生き抜く子どもたちのために「何が必要か」という明確なビジョンや願いをもち、そのためにできることをできることから教職員一丸となって取り組んでいるということです。今までに誰も経験したことがない未来が来る。その未来を生きる子どもたちへの教育は今までと同じではいけない。だからこそ学びを変えるために、教師自身から変わっていかなければいけないということを共有し、進んでいるのが学びの改革実践校だったと感じます。

各校でも様々な取組が進んでいることと思いますが、この「実践校ミーティング特集」が、各校の取組につながり、未来に生きる子どもたちの育成につながればと願っています。